広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第37号　2009．3〉

中学校「技術・家庭」家庭分野における着装学習の指導方法に関する研究

―「パーソナルカラー」探しを通した評価活動の検討―

鈴木　明子　　村上かおり　　木下　瑞穂　　藤井　志保
簑島　　隆　　一色　玲子（研究協力者）

１．はじめに

中学校「技術・家庭」家庭分野の衣生活内容における着装学習や色彩学習を概観すると,これまでに中学生の発達段階を考慮した教材や授業の開発が多数行われている。例えば色彩学習では,色の特性を理解させ,配色と似合い度についてコンピュータを用いて検討させることをねらった研究がみられる[1) 2)]。また，学習用の着装シミュレーションソフトや着せ替えゲームも販売されており，色彩だけでなく衣服の機能性やT.P.O.を考えた着装を体験できる学習教材が検討されている。しかしながら，生活を総合的に多面的に学ぶという特徴をもっている家庭科の中で，着装学習や色彩学習をどのように位置付けるか，個性の表現をどのように評価するかなど課題も山積している。畑山等（2007）は，家庭科教師を対象とした調査から，中学校の着装学習においては，衣服の機能やT.P.O.などの基本的な内容を理解させることが主たる目標であり,「自分らしい着方」について考えることは，それらの学習のための手だてとして扱った方がよいと考える教師が多い実態を明らかにしている[3)]。

一方，平成21年３月に改訂された中学校学習指導要領の「技術・家庭」家庭分野では,「Ｃ衣生活・住生活と自立」の「（１）衣服の選択と手入れ」において「ア　衣服と社会生活とのかかわりを理解し，目的に応じた着用や個性を生かす着用を工夫できること。」という表記がなされた[4)]。これまでと同様に，中学校では,小学校で学習した保健衛生上および生活活動上の着方を踏まえて,衣服の社会生活上の機能を中心に理解し,時・場所・場合に応じた衣服の着用や個性を生かす着用の工夫ができるようにすることを目標としている。ここで,「個性を生かす着用」については「着方によって人に与える印象が異なることに気付き，色や形などの調和や自分らしさを考えた着方を工夫できるようにする。具体的には，衣服の種類や組合せ，襟の形やゆとりなどによって印象が変わることに気付くことや,自分に似合う色などを工夫することなどの活動が考えられる。指導に当たっては，話合いや調査などの活動を通して，生徒が自分の衣服の着方について主体的に考え，生活における実践につなげることができるように配慮する。…」とある[4)]。学習指導要領では，個性を生かす着用，すなわち自分らしい着方について考え工夫することは，衣服の機能やT.P.O.などの基本的な内容を理解するための手だてであるばかりでなく，それらを活用して自分の衣生活を工夫しようとする能力そのものであるととらえていると解釈できる。従って,自分らしい着方の学習は，着装学習の手段として位置付けるとともに，その学習内容の一部としてとらえる必要があると考える。高等学校における着装学習との関連においても，中学校段階では，自分らしい着方を工夫するために必要な基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させることを目指したいところである。

個性を生かし,自己を表現する着装を考えるときに,自分に似合う色彩を検討することは重要である。昨年度は，生徒が描いたデザイン画をコンピュータ上で教材化することを試み，カラーコーディネートを学習する指導方法を検討した[5)]。しかしながら，コンピュータプログラムを検討する前に，生徒達の色に対する認識の実態を把握することが必要ではないかと考えた。なぜなら，前述したように，色に関する客観的な認識とともに，主観的な認識を育てることが，家庭科で目指す中学生としての衣生活の自立につながるからである。ただ，色に対するこのような主観的認識を育てる

Akiko Suzuki, Kaori Murakami, Mizuho Kinoshita, Shiho Fujii, Takashi Minoshima, Reiko Isshiki: A Research about Education Technique for a Learning of Coordinates in Junior High School Home Economics Field －Through the Evaluation Activities for Finding “Personal Color”－

ために，個性や自己を直接みつめることは，発達段階を考慮すると難しい点も多い。そこで，パーソナルカラー探しを通して，自分に似合う色を自己評価及び他者評価する活動を取り入れることを試みた。

カラーコーディネートを自己や他者の評価を通じて学ぶ方法についての研究は，生徒の興味・関心を高める課題選択学習として，美術教育においてファッション・ショーの形式を取り入れた事例がみられる[6)]。このように自己だけでなく他者の評価を交えながら，自分らしい表現力を習得することは，動機づけの面でも効果的であることが明らかとなっている。

パーソナルカラーとは，「自分に似合う色」であり，その人の肌の色，髪の毛の色，瞳の色などによって決定される，自分を美しく，魅力的に見せる色のことである。このパーソナルカラーを考えて，自分らしい着方を学ぶことは自己表現力を育むために有効であり，衣服購入の自立期である中学生の時期に行うことが適切であるという報告がある[7)]。しかし，パーソナルカラーを用いた色彩学習の実践は，まだ専門学校や大学のような高等教育機関でしか行われていないのが現状である[6)]。

２．研究の目的・方法

以上のことを踏まえて，中学校「技術・家庭」家庭分野における着装学習の指導方法を追究し，その基礎資料を得るために，本報では，自己評価および他者評価によってパーソナルカラーを探す活動を通して，生徒達の色に対する認識の実態を把握することを目的とした。得られた結果を配色やデザインの調和についての学習に反映させ，着装のイメージを明確にしてデザイン画を描いたり，着用への意欲をもって被服製作を行ったりすることにつながる指導方法のあり方に示唆を得たいと考えている。

以下に研究方法について記す。

日　時　平成20年12月

対　象　広島大学附属三原中学校３学年１組（43名）・２組（42名）

授業者　藤井志保

指導計画（全19時間）

１．わたしたちの衣服製作（衣服の構成を知ろう，製作の計画を立てよう）…１時間

２．製作の準備をしよう…２時間

３．作ってみよう…12時間
　自分に似合う色を考えよう…１時間（本時はその内の0.5時間／ HR）

４．衣服の手入れと補修をしよう…３時間

題材名　自分に似合う色を考えよう

題材目標

１．相互評価を活かして自分らしい色について考える。

２．よりよい着装の要素について理解する。

題材観

中学校技術・家庭分野の学習においては，個性を生かす着用にかかわる内容を適切に位置づけて学習することが大切である。また，そのような学習は自己肯定観を育てる重要な機会となる。被服の働きには保健衛生上，生活活動上，社会生活上の機能があり，中学校では主として社会生活上の機能を理解させる必要がある。中学生としての衣生活の自立を目指して自分らしい着方を主体的に工夫することができるように，自分に似合う色について考える学習を行った。

生徒観

対象生徒は，一年次に着装（T. P. O.）に関する学習を済ませている。また，夏休みの課題としてカジュアルベストのファッション画を作成しており，着装の配色について考える機会をもった。しかしながら，自分らしい着方を工夫するために，色に関する認識を深めたり，カラーコーディネートに関心をもったりする生徒は少ない。そこで，本題材では他者評価を反映させて自身に似合う色について考えさせ，自分にとってよりよい着装表現を考え工夫するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けさせたい。

指導観

本題材では自分に似合う色を意識させる指導の工夫が必要である。ここでは自分らしさを示す単色のパーソナルカラーを探る活動を行い，相互評価を取り入れることによって他者からみられる自分を考えさせた。さらに，単色について考えた上で，トータルコーディネートの一要素としての色について捉えられるような活動が必要である。また，製作教材としてのカジュアルベストの着装イメージを膨らませ，事後のファッションショーにつなぐことも意図している。

授業展開

※ 本時は指導展開の枠内のみ

学習内容	時	指導過程・学習活動
導入	5	これまでの自分自身の生活をふりかえり，好きな色，似合う色を思い浮かべる。ドレープ生地29枚の中から好きな色を選び，ワークシート①にその色と理由を書く。

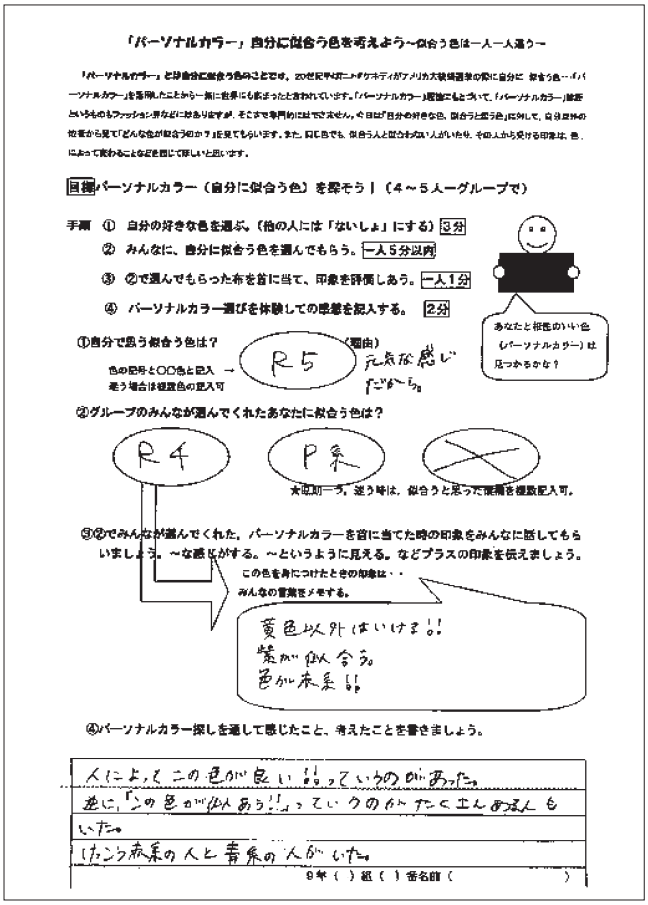
展開 自分のパーソナルカラーを探そう	15	パーソナルカラー探し：色の印象評価 ４～５人１組になり，自己評価，他者評価を通して似合う色とその理由を考える。 １．29色の布から自分に最も似合うと思う色の布を一枚選ぶ。選んだ色は，人には伝えない。 ２．他の生徒から最も似合うと思う色を１つ選んでもらう。（ワークシート②） ３．２で選んだ布をそれぞれ首元にあて，他生徒に印象をコメントしてもらう。（ワークシート③） ４．自分に似合う色探しを通して感じたこと，考えたことをワークシート④に記入する。
	5	お互いに似合う色の評価をしてどんなことを感じたか発表する。 今回の活動を，服装のコーディネートや自分の生活の中で意識してみる。
コーディネートの一要素として色を考える	20	カラーコーディネートを考える 生徒数名のファッション画を参考に，バーチャルファッションソフト「i-D Fit Jr.」を用いて視覚的に着装表現の要素を考える。 フリースベストの着装をとりあげ，自分の好きな色を服飾雑貨として取り入れたパターンや，配色を考えたコーディネートを数パターン見る。 よりよい着装表現としてTPO，配色，デザインの３つがポイントであることに気づかせ，色が個性を表現する一要素であることを改めて確認する。
まとめ	5	授業のふりかえり パーソナルカラー探しを通して考えたこと，ファッション画をふりかえり，フリースベストの着装（ファッション画）について改めて考えたことなどをワークシートに記述する。 次時は，フリースベスト製作の続きに入ることを確認する。

３．成果と課題

計画した50分のうち，実際に実施したのは，前半25分の展開のみで，これを30分で行った。授業者は，パーソナルカラー探しを有効に展開するためにはここまでで50分は要すると感じた。というのは，生徒たちの多くは，色の見分け方がよく分からないため，布を身にまとうことを楽しむだけにとどまっている状況であったからである。もし教師がここでコーディネートに関する専門的で適切なアドバイスをすることができれば，学習効果が上がることは必然であり，そのためには十分な時間が必要であろう。しかしながら，生徒たちは限られた時間の中で，色について学習することを楽しんでいる様子がうかがえた。授業の始まる前に，

資料１　パーソナルカラー探しの様子

資料２　本時のワークシート



「パーソナルカラー」自分に似合う色を考えよう～似合う色は一人一人違う～

「パーソナルカラー」と自分に似合う色のことです。20世紀半ばにファッションデザイナーがアメリカ大統領選挙の際に自分に似合う色…（パーソナルカラー）を活用したことから一気に世界にも広まったと言われています。「パーソナルカラー」理論にもとづいて、「パーソナルカラー」診断というものもファッション界などにはありますが、そこまで専門的にはやりません。今日は「自分の好きな色、似合う色」に外して、自分以外の他者から見て「どんな色が似合うのかな？」と見てもらいます。また、同じ色でも、似合う人と似合わない人がいたり、その人から受ける印象は、色によって変わることなどを目的にしたいと思います。

目標 パーソナルカラー（自分に似合う色）を探そう！（４～５人一グループで）

手順 ① 自分の好きな色を選ぶ。（他の人には「ないしょ」にする）3分
② みんなに、自分に似合う色を選んでもらう。一人５分以内
③ ②で選んでもらった布を首に当て、印象を評価しあう。一人１分
④ パーソナルカラー選びを体験しての感想を記入する。 2分

あなたと相性のいい色（パーソナルカラー）は見つかるかな？

①自分で思う似合う色は？
色の記号と○○色と記入 → 迷う場合は複数色の記入可
R5
（理由）元気な感じだから。

②グループのみんなが選んでくれたあなたに似合う色は？
R4　P系　×
★位置一つ、迷う時は、似合うと思った候補を複数記入可。

③②でみんなが選んでくれた、パーソナルカラーを首に当てた時の印象をみんなに話してもらいましょう。～な感じがする。～というように見える。などプラスの印象を伝えましょう。
この色を身につけたときの印象は・・
みんなの言葉をメモする。
黄色以外はいけま!!
紫が似合う。
色が赤系!!

④パーソナルカラー探しを通して感じたこと、考えたことを書きましょう。
人によって この色が良い!!っていうのがあった。
逆に、「この色が似あう!!」っていうのがたくさんある人もいた。
けっこう赤系の人と青系の人がいた。

９年（ ）組（ ）番名前（ ）

早く来ていた生徒が色を見やすいように並べてくれたことによって，さらに色の楽しさや色がつくりだす美しさに興味をもち，学習意欲が高まったという場面がみられた。このことからも，衣服を外的に認知する手段として，色が効果的な教材になりうることが推察できた。

また，専門的な知識を深めるには至らなかったが，人によって「似合う」「似合わない」色があることは感じていたようである。

本実践では，自分の好きな色，自分に似合うと思う色，他者からみて似合う色を挙げ，それらの評価を生かして自分らしい色について考えることが目標であった。生徒が授業中にワークシート（資料２）に記述したパーソナルカラー探しを通して感じたこと，考えたことなど，授業に対する感想の中には，自己を客観的に見たり，他者から見える自分を分析したり，他者を観察する中で自分の考えを整理したりといった内容がみられた。

これらを，表１に示すように，自己対自己の関係，自己対他者の関係，他者対他者の関係といった異なる視点の対象別に分類した。自己と他者の評価の違いに注目している生徒が最も多く20名みられた。自分では認識していなかった他者からの印象に驚いている様子がうかがえた。また，その自己と違った評価を肯定的にとらえ，新しい印象形成に挑戦したいと感じている生徒もいた。

ついで他者と他者の評価の違いについて気付いた生徒が多かった。同一の人に対する評価も人によってさまざまであること，人の感じ方にはいろいろあるということに関心を寄せていた。また他者の印象が共通している，すなわちイメージが決まっている人もいればそうでない人がいるという人の印象評価の特徴について認識した生徒もみられた。

少数ではあったが，自己の評価を自ら認識できたことに対して関心を寄せた生徒もみられた。

このようにパーソナルカラー探しを通して評価活動を行うことによって，多くの生徒がそれぞれの視点から自己と他者の関係について新しい気付きを得ていることが明らかになった。

また色の効果や色に対する関心についてのコメントも多くみられた。色によって印象が変わることに気づくだけでなく，自分に似合う色を見つけていきたいと考えた生徒もいた。

その他には，「似合う色は性格によっても決まるものである」という記述がみられ，人にはそれぞれイメージ，個性があるということに気付いていると同時に，個性が似合う色に影響を及ぼす一方で，逆に似合う色が個性に影響を与えるものであることにも思いが至っている様子がみられた。

以上から，色を媒介として，多様な評価活動を行うことによって，自己を多様な視点から客観視している様子が推察できた。特に他者評価が効果的であったと推察できる。また，色相，彩度，明度で各々の色をとらえ，顔色に映るパーソナルカラーの存在など，カラーコーディネートの原則を学び，基礎的・基本的な知識を習得させる時間はとらなかったものの，色の効果や色に対する関心についても多くの記述が見られ，認識が高まったり深まったりしている様子がみてとれた。

本実践において，色によって同じ人の印象が変わるということは理解できている生徒が多いが，さらに色のバランスやカラーコーディネートの原則を学習した上で，発達段階を踏まえた効果的な評価活動をさせる工夫が必要であろう。そのために，中学生の学習に適した評価活動をどのようにとらえるか，さらに素材によって似合い度や色のイメージが異なることをどのように扱うかも課題である。

また，デザイン画を描いたり，被服製作を行う過程で，配色やデザインの調和などについての学習を行い自分の着装のイメージを明確にしていく流れを意図的につくることも，自分らしい着用について総合的に判断するために効果的ではないかと思われる。

４．まとめ

生徒の個人差もあるが，中学３年生ならば，自分に似合う色を主観的，客観的にとらえることは可能であることが示された。

また，自己評価とともに他者評価を行うことによって，自己を客観視しやすいことが明らかになった。

さらに，色は，自分らしさや自分らしい着方をとらえる上で効果的な題材であること，パーソナルカラーという教材を用いることによって，自己と他者の関係を意識することができることが確認できた。

衣服デザインの構成要素には，デザインやシルエットなどの形態，色彩，テクスチャーや風合いなどの材質感があげられる。このうち色彩閾はもっとも遠く，短時間で認識される。すなわち衣服デザインのなかで色は最も早く印象づけられる。そのため，人は着装において色を強く意識し選択している。「パーソナルカラーとは，肌の色や瞳の色などの先天的な素質と，家庭や社会環境といった後天的な影響を受けながら，学習などによって発達段階的に形成される人格的色彩のことである。」と加藤等は述べている[8]。色彩は被服のイメージに与える最も大きな要因であるといわれている[9]。衣服の着用は個人の生活行為であり，個を認知する行為でもある。

色に関する客観的な認識とともに，主観的な認識を育て，中学生としての衣生活の自立につながる学習を展開するために，今後さらに指導方法の工夫が必要である。自分でみつけたパーソナルカラーを生かして，着用計画を立てる流れの中で，色のみではなく複合的な着装のあり方を問えるような実践を構想したい。

表１　授業感想文の分析結果

項　目		人 数	コメント例
視点の対象	自己 ⇔自己	2	・自分で自分の似合う色がわかった。
	自己 ⇔他者	20	・自分で似合うと思っていた色と他人が似合うという色が違うと思った。 ・薄い色しか選んでいなかったけど,濃い色も似合うといってくれたのでトライしたい。 ・いつもは好きな色の服を着ているけど,黄色も似合うといわれた。似合うのかなと思ったが案外大丈夫だったのでよかった。 ・思っていた色と違ってちょっと驚いた。他人の目から見てみると自分の意識と異なるんだなと思った。 ・普段は黒ばかり着ていたが，違う色も着てみたいと思った。 ・自分では黒が似合うと思っていたが，他の人からは違っていた。 ・他人の目から見てみると自分の意識とは異なるんだなと思った。 ・まさか自分がピンクが似合うとは思わなかった。 ・自分のよく着ている服とみんなの思う色が違っていてびっくりした。 ・黒や白ばかり着ていたけど黄色の服も買ってみようと思った。
	他者 ⇔他者	12	・人の感じ方もいろいろだと思った。 ・人によって対象となる人のイメージが違うので面白かった。 ・似合う色がみんな違う色で面白かった。 ・すぐに似合う色が決まる人もいたが,どれでも似合う人もいて人間性まで感じられた。
色の効果・色に対する関心		20	・色でイメージが変わるので，色は大切だと思った。 ・色によって同じ人の印象が大きく変わるのでおもしろかった。 ・人それぞれで似合う色が違うことがわかった。 ・好きな色と似合う色は違うと思った。 ・色にはたくさん種類があって，それぞれの色の良さがあると思った。 ・好きな色と地の色とパーソナルカラーを合わせるのはちょっと難しい。 ・他の人の色を決めるのは楽しいと思った。 ・自分の似合う色を見つけていきたい。 ・みんなの似合う色が発見できて楽しい時間だった。 ・それぞれの個性が色に表れていると思った。 ・色で人の印象がこんなに変わるとは思わなかった。意外だった。 ・ほんわかだなと思った人が，意外とビビッドが似合っていたりしてびっくりだった。 ・自分にとってのパーソナルカラーを探せていたと思う。 ・その人それぞれに合った色があるのを初めて知った。 ・パーソナルカラーはファッションを決めるときに役立ちそうだと思った。 ・その人に似合った色を見つけると服選びに使えると思った。 ・たくさんの色があって，一つの色でも薄さ，濃さがあった。薄さや濃さで，同じ色の系統でも似合うかどうか決まってくると思った。
その他			・日頃，みんなの私服をみないのでどんな色が似合うかわからなかった。一週間くらい私服で通学するのもいいかもと思う。 ・顔映りというより人のイメージで選ばれたような気がする。 ・人に見てもらうと自分がどの色が似合うのかすぐわかった。 ・みんな一人一人個性があって似合う色も違うんだなと感じた。 ・人にはそれぞれのイメージがあることがわかった。 ・色は性格によっても決まるものだということがわかった。 ・一人一人個性があるのだから印象から受ける色の種類も一人一人違うことがわかった。 ・おもしろかった。もっとゆっくりやりたい。

引用（参考）文献

1）福澤素子，本多真由美，「被服領域における色彩評価を学習するためのコンピュータ・プログラムソフト（1）―色の基本特性を学習するためのプログラム」，日本家庭科教育学会誌，Vol.38，No.2，57－63，1995.

2）福澤素子，本多真由美，「被服領域における色彩評価を学習するためのコンピュータ・プログラムソフト（2）―配色とその似合いの評価を学習するためのプログラム」，日本家庭科教育学会誌，Vol.38，No.2，65－70，1995.

3）畑山真智子，鳴海多恵子，「中学校衣生活領域の「自分らしい着方」の扱いについて」，日本家庭科教育学会第50回大会研究発表要旨集，110－111，2007.

4）文部科学省，『中学校学習指導要領解説（平成20年9月）技術・家庭編』，教育図書，2008.

5）木下瑞穂，鈴木明子，藤井志保，簑島隆，「家庭科におけるコンピュータを利用したカラーコーディネートに関する指導方法の検討―生徒が描いたデザイン画を元に―」，広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要，第36号，513－516，2008.3.

6）山田一美，「ファッション・ショーを取り入れた色彩学習の実践教育―課題選択学習を志向して―」，大学美術教科教育研究会報告，No.9，185－196，1987.12.

7）久保田覚，「パーソナルカラー調和理論を取り入れた色彩教育の展開事例」，日本色彩学会誌，Vol.28，4－5，2004.5.

8）加藤雪枝，石原久代他著，『生活の色彩学』，朝倉書店，2001.

9）長町三生，『感性工学』，海文堂出版，1989.

10）佐々木貴子，腰山みゆき，横井由利子，小阪真理子，「自己表現力を育てる衣生活教育の提案―小・中学校でのパーソナルカラーをとり入れた授業の検証―」，北海道教育大学教育実践総合センター紀要No.4，259－266，2003.3.